

【論文】

出会い系メディアの社会学

—加速する社会におけるパパ活の未来—

Sociology of Dating Sites and Apps
: The future of sugar dating in an accelerating society

圓 田 浩 二⁽¹⁾
Koji MARUTA

専門分野：社会学

要約

本稿において、「出会い系メディアとは、不特定の人間とのコミュニケーションを仲介するメディアを指す」と考える。出会い系メディアは、不特定の異性或同性との出会い、恋愛、性的接触を目的に作られた電子メディアと考える。出会い系メディアは、電話回線やインターネットを媒介して新しい形の「出会い」を生み出してきた。本稿では、出会い系メディアの変遷と「出会い」の意義、そして、人間の性欲と社会との関係について言及し、援助交際やパパ活の未来を予測する。そして、最新の社会学理論の諸考察から、援助交際やパパ活のような金銭で割り切った性的な関係は今後もますます必要とされていくと結論づけている。なぜなら、現代社会では対面的な出会いと、共にその場所に身体的にいることがますます重要になっているからである。出会い系メディアは、社会的、そして社会学的必要性から、今後も利用され、発展していこう。キーワード：パパ活、売買春、出会い、出会い系メディアの歴史、加速する社会

Abstract

In this paper, the author considers that “dating sites and apps are media that mediate communication with an unspecified number of people.” Dating sites and apps are considered to be electronic media created for the purpose of meeting, romance, or sexual contact with an unspecified number of people of the opposite or same sex. Dating sites and apps create new forms of “encounters” through telephone lines and the Internet. This paper discusses the changes in dating sites and apps, the significance of “dating” and the relationship between human libido and society, and predicts the future of compensatory dating and sugar dating. Based on various considerations of the latest sociological theories, this paper

(1) 沖縄大学 法経学部法経学科教授。

concludes that financially determined sexual relationships such as compensated dating and sugar dating will continue to increase. This is because face-to-face encounters and being physically present together in the moment are becoming more and more important in today's society. Dating sites and apps will continue to be used and developed out of social and sociological necessity.

Keywords: Sugar dating, Prostitution, Encounters, History of dating sites and apps, Accelerating Society

1. 出会い系メディアの社会学の歴史

1-1. 出会い系メディアとは何か？

ジョン・アーリは、社会学において「出会う」ことの重要性が見過ごされてきたと指摘する。「社会学における「会うこと」の地位を復権させること」[Urry 2007=2015 p.342]を目指して、その著書『モビリティーズ』に「人に会う」と題した第11章を設けている。「本書では、「会うこと／会合／ミーティング」という語を下記の点を指すために用いる。すなわち、「議題」、構造、予定表によって完全に公式化された会合とインフォーマルな会合の両者を指」[Urry 2007=2015 p.342] すとしている。本稿で扱う出会い系メディアを介した援助交際やパパ活での出会いはインフォーマルな「会合」に当たる。

人と人が出会うには接点が必要である。学校や職場、地域など、直接に出会うことは昔も今も変わらないが、本稿はメディアを通して出会いについて考察する。主に個人的な出会いについて研究し、それぞれの持つイメージについて考えてみる。

「第三者を媒介したお見合いも出会い系メディアの一つといえる。結婚相談所、また、紹介や合同コンパなども人を介したものとして同様である。雑誌などの一昔前によく見かけた『文通コーナー』欄があったが、これも紙媒体のメディアを通じた出会い系コンテンツである。

テレビでは1970年代から80年代にかけてお見合い番組が多く登場した。プロポーズ大作戦 1973-85、パンチ de デート 1973-85、ねるとん紅鯨団 1987-94、ウエディングベル 1993-97 など、他に地方局にも数多く存在する。これらを通して出会い、結婚に至ったカップルも多い」[中村・木本 2022.12.17] とされ、出会い系メディアと言っても、昔の雑誌に存在した文通コーナーから結婚相談所、テレビ番組までさまざまな形で存在してきた。公的に「出会い系」という言葉が誕生したのは、1995年にリクルート社から創刊された個人情報雑誌『じゃま〜ル』⁽²⁾に「出会い系」というジャンルが登場した[荻上 2011 p.55] ときである。

本稿では、「出会い系メディアとは、不特定の人間とのコミュニケーションを仲介するメディアを指す」[圓田 2006 p.75] とし、不特定の異性や同性との出会い、恋愛、性的接触を目的に作られた電子メディアと考える。出会い系メディアは、電話回線やインターネットを媒介して新しい形の「出会い」を生み出してきた。出会い系メディアの変遷と「出会い」の意義、そして人間の性欲と社会との関係について言及し、援助交際やパパ活の未来を予測する。

(2) 個人情報雑誌『じゃま〜ル』については、じゃま〜ル追跡グループ著の『じゃま〜ル「その後」大追跡!』が詳しい。

1-2. 出会い系メディアの歴史

電話回線やインターネットを媒介した出会い系メディアの歴史は、テレフォンクラブ（1985年から現在2店舗）→ダイヤルQ 2⁽³⁾（1989年から2011年）→伝言ダイヤル（1986年から2016年）やツーショットダイヤル（1989年から現在）→出会い系サイト（インターネット異性紹介事業、1995年から）→ツイッターなどSNS（2006年から現在）→パパ活サイト（2016年頃から現在）となっている。電話回線やインターネットを媒介した出会い系メディアの歴史には、1984年の「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」（いわゆる風営法）の改正がありテレクラがその適用対象外であったこと、1985年の日本電信電話公社の民営化によるNTTの誕生とフリーダイヤル（0120）の登場、1986年の伝言ダイヤルサービスの開始、1989年のダイヤルQ 2の登場などがこれらのメディアを形作ってきた。またその受信メディアも、固定電話や公衆電話から、1990年代のポケベル→PHS→携帯電話→2000年代のスマートフォンへの変化があった。こうして1990年代のインターネット技術の普及なしには出会い系は語れなくなった。技術や発明、法律が出会い系メディアを牽引する形でその発展を促してきた。

また、対面を必要とする出会い系メディアの歴史は、愛人バンク「夕暮れ族」（1982年から1983年）→デートクラブ⁽⁴⁾・交際クラブ⁽⁵⁾（昔から存在）→出会い系喫茶（少なくとも2011年以前から現在）となっている。

また、出会いに際して金銭の関係が発生しないもの、つまりカップリングや飲み会、友達募集などの系統は、出会い系サイト（1995年頃には掲示板型と会員制のプロフ型との2つのタイプが

(3) このQ 2の普及によって、テレクラ、ツーショットの市場規模は全国レベルで従来の五百億円（推計）から一気に一兆円（同）規模の産業になることになった。その理由としては、業者が増えたこと、利用料が店舗型の平均的なテレクラの二倍くらいにはね上がったことなどが挙げられる〔現代ネットワーク研究会 1998 p.119〕。

(4) 藤井良樹は、女子高校生のデートクラブのルポを残している。「93年になつたばかりの冬の日。僕は、坂道を登っていた。若者向け雑誌などでは「おしゃれな街」「住んでみたい街」などと紹介されることの多い東京都内の街。そこに「女子高生デートクラブ」があるという情報を知り合いのカメラマンから聞き、その店のあるマンションに向かっているのだ。客として、潜入取材するのが目的である。そのカメラマンは、テレクラで話をした女の子からデートクラブのことを聞いたという。教えられたマンションにたどり着き、エレベーターで10階に上がる。同じ階には、学習塾やサラ金などが入っているようだ。店のドアの前に立ち、インターホンのボタンを押す。少し、どきどきする。すると、インターホンからではなく部屋の中から、割りとお愛想のいい男の声がした。「どうぞ、お入り下さい」。言われるがままに、ドアを開ける。うつむき加減にドアを開けた僕の目に飛び込んできたのは、狭い玄関スペースに溢れている女物の靴、そして顔をあげるとワンルームの部屋いっぱい、女の子たちがいるのが見えた。女の子たちは13～4人いるだろうか、みんな様に若い。たぶん現役の女子高生だろう」〔藤井 1994 p.100-101〕。

(5) 援助交際時代の交際クラブはデートクラブと変わらなかったようである。「交際クラブ」と書かれている。その下に電話番号が書かれているが、それは携帯の番号だった。最近のすすきでは、ホテルのピラでさえ見かけなくなっている。それで、ピンと来た。さっそく電話してみる。「あの、ピラを見たんですけど、どんな店なんですか?」「はい、うちは店じゃあないんですよ。男と女の交際の紹介役をしているだけで…」よくよく話を聞いてみると、東京でいうところの交際倶楽部のようなものだった。この男が何人かの女の子の電話番号を確保していて、客からの要請があればその女の子を呼び出す。紹介の手数料をとるだけだが、その後の責任は一切負わない。「で、いくらですか」「一人の女の子に紹介して、5,000円です」「それで、そのまま女の子が帰っちゃうことになるんじゃないの?」「いいえ、女の子は最低でも1時間はデートしてくれることになっています」「その1時間の間に、ホテルへ行ってもいいの?」そう尋ねると、後は女の子との交渉次第だといった。プロの女の子はいなくて、大半が女子高生だという。だから、ホテルへ行くことは保証できない」〔吉岡 1997 p.108〕と記述されている。

あった[荻上 2011 p.63] → ツイッターなどSNS (特定アカウントへのダイレクトメッセージ) → マッチングサイト (ペアーズ、ウィズ、ティンダーなど、2012年から現在) など出会い系サイトなどとなっている。

1-3. テレクラが引き起こした「出会い」の大変革とあだ花「女子高生」

1985年に新宿の「アトリエキーホール」という元覗き店で誕生したテレクラは、1985年にNTTが開始したフリーダイヤルサービスを利用し、女性からの電話は無料を謳っていた。当初売買春のためのメディアではなく、「素人女性相手にテレホンセックスすることが男性客の目的だった」[宮台 1996 p.124] と記述されているようにテレホンセックスのツールだった。そのうち、一般人が参加し、いろいろな目的を持つコミュニケーションが生まれた。初期のテレクラについての記述では、「この道のベテランに聞いてみると、みな様に「テレクラの黎明期は、まったく現在とは異なるものだった」と口をそろえる。当時、テレクラで話す男女は世間話で満足し、伝言ダイヤルにいたってはフリー・マーケットのように商品の売買情報が流れるなど、なんでもありの状態だった。ローテクなインターネット、みたいなものだったのだろう」[現代ネットワーク研究会 1998 p.10-11] と記述されている。「ここに来ることに後ろめたさとかはないですね。だってここは、日常の中の非日常が味わえる楽しい所なんだから」[現代ネットワーク研究会 1998 p.13] という非日常が体験できる場所でもあった。まだインターネットが普及していない時代には、現在のインターネットのような使われ方がされていた。

しかし、そのうち恋愛相談やテレホン・セックスのツールへと変わり、その後、性交のための「出会い」、そこに金銭が発生して、売買春のメディア、つまり援助交際のメディア⁽⁶⁾となった。テレホン・セックス時代のテレクラについては、「背景には、テレクラ誕生の三年ほど前から、専業の女性がテレホンセックスの相手をする銀行振込式の『テレセ産業』が隆盛だったことがある。他方、女性相手の週刊誌広告や郵便受けに入るチラシは“やさしい男性が電話の向こうで悩み(性の悩みも含め)の相談にのってくれる”ことを売り文句にしていた。だからできたばかりのテレクラでは、テレセ(筆者注: テレホン・セックスの略称) 目的で個室で悶々と待つ男性のもとに、カウンセリング窓口だと勘違いする女性のコールがつながるといふ滑稽な光景も見ら

(6) ヤマダモアイの『オトナの電話ネット攻略読本』では、電話風俗と呼ばれた電話による出会いと売買春の歴史を次のようにまとめている。「1985年新宿歌舞伎町に、テレクラ1号店「アトリエキーホール」誕生。以後急速に全国に広がっていく。1986年NTTが伝言ダイヤルサービスを開始。混線番号を使用したパーティーラインがこのころから流行り出す。1990年NTTがダイヤルQ2サービスを開始。ツーショットダイヤル、オープンBOX付きの伝言ダイヤルが登場。Q2当初からパーティーラインが大流行。1991年ダイヤルQ2でツーショットが禁止される。銀行振り込みによる一般回線ツーショットが登場。1992年ダイヤルQ2でのパーティーラインの料金規制が実施される。最高でも3分につき60円。この規制以後、パーティーライン業者が続々と撤退。パーティーラインそのものが廃れ始める。1994年ダイヤルQ2で、オープンBOX付きの伝言ダイヤルが禁止される。ダイヤルQ2ですべてのアダルト番組(0990-3で始まる番号)への発信が完全申し込み制となる。つまりアダルト番組にかけたいときは、まず最寄りのNTTまで足を運んで手続きをしなくてはならなくなった。多くのQ2業者が撤退。ダイヤルQ2黄金時代終焉。1995年岐阜県で最初のテレクラ規制条例が制定される(禁止地域内にあるテレクラ店舗は2年以内に移動。ツーショットや伝言ダイヤルについても、広告や交換機の設置場所についての規制が盛り込まれている)。1996年各県で続々とテレクラ規制条例が可決される(内容はほとんど岐阜県のものと同様)。1997年ついに東京都でもテレクラ規制条例が可決施行。長野県をのぞく全都道府県でテレクラが規制される。東京都では、年内に淫行処罰規定を設置する予定」と記述されている[ヤマダ 1997 p.29]。

れた。しかし八六年までには男女が実際に会おうきっかけにも利用できることが、メディアでの喧伝から広く知られるようになる。この年、テレクラ人気は東京都郊外や地方都市にも飛び火。十月には全国で四百十八軒を数え、風俗ルポが賑わいを見せる」[宮台 1996 p.124-125]と記述されている。

「成人男性の「援助交際」が社会問題としてクローズアップされるようになってからであり、今や一般に、「テレクラ→援助交際」⁽⁷⁾ という認識図式が当然のものとされていると言っていい。

「人」対「人」の在り方を劇的に変えた一九世紀の偉大な発明＝電話が秘めた潜在能力はその程度ではないはずだ」[現代ネットワーク研究会 1998 p.10]。1997年や1998年頃には、「テレクラ＝援助交際」という図式が存在していたことが分かる。

「一九世紀の偉大な発明＝電話が秘めた潜在能力」とは、電話というメディアを介した、第三者に知られることのない、素人同士の出会いや売買春、性的な行為の金銭への置き換えが発生したことである。例えば、売春をして金銭を得たい女性がいるならば、テレクラ以前はソープランドのような性風俗で働か、デートクラブや夜の酒場のマスターみたいな第三者を通して相手を見つけるか、「立ちんぼ」のようにラブホテル街や駅近くの雑居ビルの通りに突っ立って相手が見つかるのを待つしかなかった。しかし、テレクラはこのようリスクを冒すことなく、同時に別のリスクを抱えることになるが、女性に無料の出会いと売春などの機会を与えたことになる。援助交際による出会いと売買春関連の行為は急速に広まっていった。「そこに共通するのは、匿名性の付き合いであるがゆえの、欲情がむき出しになった非日常の世界……。事の善し悪しは別にして、ここにきてそんな奇妙な風潮が急速に蔓延し始めている」[現代ネットワーク研究会 1998 p.127-128]と記述され、テレクラにおけるコミュニケーションの特徴は、「非日常」、「匿名性」、「欲情」という言葉で表現することができる。

当時に1997年当時のテレクラの女性向け広告と男性向け広告を見ると、論文「「パパ活」の定義論」で取り上げたパパ活サイトの女性向け宣伝と男性向け宣伝とそう変わらないことに驚くだろう。どんな広告を見て女性たちが電話をかけてくるのかを、当時のテレクラにおける女性向け広告の文言に見てみよう。「一本の電話からドラマは始まる」、「愛の快感ストーリー」、「リッチな彼との出会い」、「プレゼント大好きリッチボーイ」、「Hなおしゃべり大～好き」、「恋人探しの決定版」、「もう一人、彼が増えるかも!」とあり、真面目な恋愛相手探しからセフレ募集、Hな会話、そして金銭的に余裕のある男性との出会いが謳われている。金銭的に余裕のある男性との出会いは、2016年以降「パパ活」と呼ばれるようになる。また男性向け広告には、「ヌレヌレ彼女があなたを待ってる!」、「オナニーのお供に!」、「即アポコールが満載」、「すぐ会える、すぐヤれる」、「今すぐ生Hできる」、「肉欲でマンタンの熟女コールが貴男をお待ちしてます」、「生妻、人妻一番搾り……ヌキ終わったらティッシュはゴミ箱へ」[ヤマダ 1997 p.12-13]とある。男性向けには、Hな女性たちが電話の向こうで待っていることやインスタントな出会いや性交、テレフォン・セックスでオナニーできることが書かれており、男性側の行為としての性交と射精の

(7) 福岡で「援助交際」という言葉が登場するのは1993年頃である。「福岡で「援助交際」という言葉が登場するのは、ちょうどこの頃のことだという。あるテレクラの店長は、「この頃から、伝言ダイヤルの中に援助交際を希望する女子高生のメッセージが入るようになったんです。最初は「援助交際」という言葉の意味が分からなかったんですが……」と語っている[現代ネットワーク研究会 1998 p.121]。

完遂に重点が置かれている。

こうしてテレクラは援助交際の場所と空間となり、女性の中でも「女子高生」が男性たちの人気を集めていく。「援助交際＝女子高生」という図式の完成は、素人女性の中でも、若くて世間づれしていない、まだ未成年の女性の身体が男性たちの性欲の対象となったことの証だと言える。1989年のエロ小説は「11時に《アルタ》の前だ。17歳の子と話が決まった」[豊田 1989 p.12]というテレクラで17歳の女子高生とのアポを取ったことからストーリーが始まる。また18歳の女子高生の話として、「援助交際のオジサンは友達どうして紹介し合ってる。その方がヤバくないし、手間はぶけるし、ポッタくられることもないから。援助してることは、彼氏はもちろん、クラスの男子にも秘密。高校卒業したらやめるつもりだよ。若いときは稼げるうちに稼がなきゃね」[現代ネットワーク研究会 1998 p.88]という話が掲載されている。藤井良樹の話によれば、「結局、男性客の殆どは女子高生とセックスをしたいわけだから、3～4万円で売春OKのコたちが現れると、食事だけでデート料を払うなんてことはしなくなる」[吉岡 1997 p.18]と、男性の買春の対象が一般女性から「女子高生」に移っていたことが分かる。しかし、その20年後、「食事だけでデート料」を支払うことがパパ活の行為内容として、「楽に大金が稼げる」というイメージを付与し、女性側に宣伝されていく。

2. 現代のパパ活サイト

現代のパパ活サイトは何種類もある。「ワクワクメール」や「ハッピーメール」などの出会い系サイトとは違って、情報が豊富で、女性側はプロフィール画像はもちろんのこと、「Instagram」や「TikTok」のような動画も載せることができる。女性側が加工された写真か、加工なし顔写真（いわゆる「奇跡の1枚」で実際に会ってもその人とはわからない）を掲載することは当たり前となっている。顔なしのプロフィールの女性には男性たちは積極的にコンタクトを取ろうとしない。また、嫌な相手やトラブルのあった相手からのメッセージをはじめブロック機能、嫌な相手やトラブルのあった相手を晒す「晒しサイト」[『ペイターズ PJ地雷 掲示板』2022.12.16] などがあり、相手を探す際の選択肢の多さやトラブルに対する対策が充実している。

これら機能によって、効率的な相手の選択と、リスクの回避、素早い出会いを実現している。パパ活サイトでは、タイムラインから相手を探すことが多いのが特徴的である。例えば「現在新宿近辺にいるPJ」がマップ上に表示されたりなど、実現するかも分からない出会いのために、時には1ヶ月前から数多くのメッセージのやりとりをしなくても済むようになっている。タイムラインの利用によって、コミュニケーションのやりとりに必要な長い時間の浪費とその手間を省くことができるようになっている。近年の加速度的なインターネット技術の進歩が最近のパパ活サイトには使用されている。

『Sugar Daddy』というパパ活サイトでは、正しい統計に基づくものかは分からないが、会員の統計データを公開している。登録者数の男女比は28%と72%であり、職業は男性が会社経営36%、女性が学生31%と一番多い。プロフィール欄は自己申告なのでなんとも言えないが、会社経営者と学生（大学生や専門学校生など）とのパパ活が多いことになる。年代別で一番多いのは、男性が40-49歳が37%、女性が20-29歳79%である。身長・体型については、男性が身長170-179cmが55%で普通体型が47%、女性が身長150-159cmが56%で普通体型が53%である。この

データに基づいて、平均的な『Sugar Daddy』の利用者について考えてみると、男性は40-49歳で身長170-179cmの普通体型の会社経営者と、女性は18歳-22歳で身長150-159cmの普通体型の学生とがパパ活を行っているということになる。金銭的に余裕のある40代男性が女子学生とパパ活を行っているのが日本のパパ活と言えるかもしれない。このようになったのには社会的理由がある。それを見ていこう。

3. 加速する社会とネットワーク化された社会

3-1. 加速する社会と出会い系メディア

ドイツの社会学者ハルトムート・ローザは次のように「近代」を定義している。「今日でも影響力の大きい近代化の定義とは、これを個人化、合理化、分化、生産力の増大による自然支配拡大のプロセスと捉えるものだが、それらに共通する核心には社会生活の途方もない加速、流動化、動態化の経験があるということである」[Rosa 2005=2022 p.68]。近代化を加速ととらえるならば、日本の買春・売春文化も当然影響を受ける。ここ40年でのメディアの変化と出会いの方法、「出会う」場所の入れ替わりがそれを如実に示している。

「空間の優位から時間の優位への転換が生じたことについてはすでに明らかにした。しかしながら、その転換の原因は移動速度の加速だけではない。少なくともそれと同程度、転換に寄与しているのは情報伝達の加速である。「マラソンランナー」から馬を使った伝令、狼煙、伝書鳩、それから電信装置、電話、最終的には、データが自身の居場所をもたずに光の速度で伝達される」[Rosa 2005=2022 p.89]。インターネット技術の進化による、コミュニケーション・メディアの変化は、出会い系メディアにおいては、テレクラから現在のパパ活サイトまでの変化によってみることができる。そういう中で、業者や援デリ⁽⁸⁾と言った中間業種が生まれる。これは、プロの風俗嬢と素人(?)の間で起きた流動化を示す例である。

「これら三つの加速形態とは、技術的加速、社会変動の加速、そして生活テンポの加速である。ここで加速のこれらの三つの形態ないし次元を精密に規定し互いに区別することにする」[Rosa 2005=2022 p.87]。電話やインターネット技術の進化、プロではない素人市場の成立とその社会問題化(過去には援助交際の社会問題化)、出会いの効率化と時間短縮化などがこれに該当する。特に考えなければならないのが、パパ活を行う相手との関係期間の短期化で、PJの多くはPによって1回きりから長くても定期が半年くらいで切られることである。ここには、「生活テンポの加速」が関連しており、男性側はネット上に登録・存在している数多くのPJの中から、パパ活相手ができるだけ多く、より早く安く安全に出会うことを目標としている。お気に入りになれば、定期の関係を結ぶが、その関係も1年と続かない。

「これは技術的加速の要素を含まない社会変動の加速を表す事例であるといえる。こうした概念の違いは技術的なイノベーションが普及を遂げるまでの歴史によく示されている。一九世紀末におけるラジオの発明からそれが五〇〇〇万人の聴取者に普及するまでには三八年を要した。そ

(8) 「援デリとは、「打ち子」と呼ばれる管理スタッフが携帯電話を使って出会い系サイトにアクセスし、個人で援交する女性のフリをして「行きずりのパートナー」を募集する。携帯でメッセージを打つから打ち子というわけか。こうして男性客とアポイントが取れた時点で、キャスト女性が待ち合わせ場所に向かい、そのままホテルで売春行為に至る」と記述されている[鈴木 2012 p.6]。

の二五年後に導入されたテレビは五〇〇〇万人に普及するまでわずか一三年しか要さず、さらにインターネット接続は最初の接続者から五〇〇〇万人目まで四年しかかからなかった。こうした知見に基づいて、トーマス・H・エリクセンは「誰がいまだに、二〇世紀の間に〔社会の〕変動の速度が上昇したことを疑うであろうか」といった修辞疑問を発している。また、F・ハイリゲンもこれと同じような数遊びをやっている。ハイリゲンによれば、一七一四年におけるタイプライターの発明からそれが市場を通じて普及するまでに一七五年、二〇世紀の初頭における冷蔵庫や掃除機といった発明が普及するまでにはおよそ三〇年から四〇年を要したのに対し、CDプレーヤーやビデオレコーダーといった新しいテクノロジーの発明から大規模な普及までにはわずか一〇年しかかからなかったという〔Rosa 2005=2022 p.92〕。パパ活サイトの利用者や実際にパパ活を行っている・いた男女の数は正確に把握できないが、2016年に現代の意味で「パパ活」という言葉が使用されて以来、いつの間にか「流行」となってしまった。今後も加速度的に技術が発達し、多くの人々が利用しようとするだろうし、またその移り変わりも早くなるだろう。テレクラは実際に利用されていたのが25年、出会い系サイト「ワクワクメール」や「ハッピーメール」は15年ほど持った。パパ活サイトは7-10年くらい利用されるのではないだろうか？

「空間、他者、事物世界の物的構造に対する私たちの関係が変化することは、近代化のプロセス全体にとって特徴的なある共通の論理に沿っている。その論理とはいわば「液状化」であり、すなわち刹那的で、すばやく変化可能で、偶発的なものである。こうして一方では、社会の交通技術による社会のモビリティ上昇は、主体と領域的に限定された空間との間にかつてあった結びつきを解体し、他方でコミュニケーション技術の発展——これは誰にでも、いつでも、誰とでも、世界規模のコミュニケーション的な結びつきをもたらすものである——は、近代化のプロセスにおける社会諸関係の変化のある本質的な前提を意味している。この変化は次の点に存在している。第一に、組織のパターンと諸関係が地理的な空間ともはや結びついていない、あるいはかつてほど強くは結びつかなくなったということ（そしてそれゆえに、一方でそれらはよりいっそう容易に解消され、変化するが、しかしながら他方でまた距離を超えても保持される）。第二にコミュニケーション相手の数が増大し、またこれらが目まぐるしく交代すること。第三に社会的相互行為の質に不可抗力的に作用し、それによって社会関係それ自体の質に作用する、さまざまなコミュニケーションメディアが変化すること。対面的接触とメディアに媒介された相互行為の間にあるさまざまな差異は、このことに対するよく知られた例なのである〔Rosa 2005=2022 p.130〕。「その論理とはいわば「液状化」であり、すなわち刹那的で、すばやく変化可能で、偶発的なものである」ことは、出会い系メディアにおける玄人と素人、プロとアマの境界が曖昧になっていることで理解できる。パパ活を行っていない素人がパパ活を1回行えばもう素人やアマではなくなること、その回数が増えていけばプロに近づき、男性側からは「セミプロ」と見られることになる。そうすると、「素人やアマ」的価値がなくなり、業者や援デリと言った中間業種に誘われ、その「女性キャスト」や従業員(?)になることもあるだろう。そのためか、パパ活サイトにおいて、会員期間と出会いの経歴を初期化し、ゼロにするために、入退会を繰り返すPJには「ゾンビ」という蔑称が付与されている。

性交（性的接触）をする関係もまた液状化し、「恋人・夫婦関係／ソープランド、ヘルスなど」に区分されていたものが、その間に素人やアマによる売買春市場が生まれる。またそれを表す言

葉が「ウリ→エンコー→ワリキリ⁽⁹⁾→パパ活(大人)」と変わっていることと、市場を媒介するメディアの変化と流動性がそれを示している。また、PにとってもPJにとっても、コミュニケーション相手の数が増大し、またこれらが目まぐるしく交代することが、現代のパパ活の特徴である。

「エリクセンが述べているように、こうした形での速度限界の引き上げ、そしてそれと結びついた速さや遅さに関する認知感覚の変化は、たとえば次のような事態にも現れている。すなわち、一八世紀には人々の理解を超えた健康を害するほどの速度で移動し、いままさらなる高速移動を実現している鉄道でさえ、今日では速度が遅くゆったりとした交通手段として捉えられており、アウトバーンや飛行機などと比べるとまさに典型的な〈スロータイム〉の移動手段に位置づけられるのである。これと全く同じようなことが今日のある一部のジャズ音楽にも認められる。ジャズが生まれた二〇世紀の前半、それは息もつかせぬ、目まぐるしい、非常にハイテンポで、機械的な、混沌としてくらくらするような音楽だと感じられていた—またそれは、その時代が同様の特徴をもっていることの反映だと捉えられていた。しかし今日では、同じジャズが「平穏な時間のための音楽」また「ゆったりとした午後のためのジャズ」などと宣伝されているのである」[Rosa 2005=2022 p.102]。生活のテンポを性生活のテンポに置き換えて考えてみよう。人生80年時代の夫婦関係は50年くらい(30歳で結婚、離婚せず)である。近代以前は15-20年くらい(15歳で結婚、30-35歳で死亡)と比べると、婚姻期間が大幅に伸び、ある夫婦にとっては長すぎると感じられるかもしれない。性生活のテンポにあわせる形で、夫婦間で倦怠期とセックスレスが生まれ、それを補う形で、離婚や不倫、愛人関係、パパ活、性風俗産業がそのテンポを維持する。

アンファー株式会社が2016年に日本の既婚男女1,000人を対象に行ったインターネット調査において、セックスレス夫婦であるかどうか尋ねたところ、全体で「セックスレス夫婦」の割合は59.1% [アンファー 2016] となった。約6割の夫婦がセックスレスである。「セックスレス夫婦の割合を年代別にみると、30代では47.0%、40代では59.0%、50代では71.3%と、年代が上がるにつれ高く」なった。この調査が正しいとすると、婚姻関係を続けている男性と女性の性欲はどこに向かうのだろうか？その受け皿となるのが、不倫、愛人関係、パパ活、性風俗産業ではないだろうか？

その中で、プロと素人の中間にあり、相手の選択肢が膨大で、簡単に関係を調整できて、切ることができる援助交際やパパ活は決して消えることがない。素人相手には人間関係が問題となり(セクシャルハラスメントや性犯罪の多さを考えよ)、プロ相手ではただ金銭を対価にサービスをされているだけだと感じて虚無感を覚えることになる。ここに「出会い」の要素、金銭授受による単なる性的行為ではなく、もしかしたら「恋愛」や「結婚」(過去にはテレクラや出会い系サイトでの結婚事例があった)という物語も夢想することができる。

(9) ワリキリについては、荻上チキの『彼女たちの売春』が詳しい。「ワリキリをする女性には、ストリートで直接客を探す以外の手段として、主に「出会い系サイトを使う」「出会い喫茶を使う」「テレクラを使う」といった選択肢がある。それぞれにメリットとデメリットがあるため、それぞれの利用者への聞き取りをすることによって、売春女性がワリキリに望むことを立体的に浮かび上がらせることができる」[荻上 2012 p.278]。「出会い系サイトでやりとりされているメール件数を確認するだけでも、この国では少なくとも、一日に1万件以上のワリキリが成立し、月に一度以上の頻度でワリキリを行う女性が、少なくとも10万人前後は存在していると考えられる。一時期はワリキリを行っていたものの、「卒業」した者の数は、その何倍にもものぼるだろう」[荻上 2012 p.316-312]。

3-2. ネットワーク化された社会

ネットワーク化された現代人の生活は、ジョン・アーリによれば、①スモールワールド：6次元の繋がり、②貴族システム：ネットワークを通して、豊かな者はさらに豊かになり、貧しい者はさらに貧しくなる、③対面的な出会い、集いの重要性、「集まって会うことが重要であるからだ」[Urry 2007=2015 p.318]とされる。出会い系メディアにおいて、①スモールワールドは基本男女の1対1の関係となり、②貴族システムにおいては、男性側は社会的ステータスが高く（医師や弁護士など）て裕福（会社経営者など）な者は多くの出会いの機会を得ることができる。女性側は特定のカテゴリに属し、若くてセクシーやかわいい、美人、清楚などの属性をもつ女性たち（「女子大生」など）は多くの出会いの機会を得ることができる。皮肉にもこのような現状が歴然と存在しているがゆえに、パパ活アプリやマッチングアプリにおいては、男性側は社会的ステータスや年収を偽らなければならず、女性側は見た目や年齢、体重、職業欄を偽らなければならない。③対面的な出会いにおいては、いくらサイト内やアプリ内でコミュニケーションを重ねても、最終的には会わねばならない。

その時、男女ともプロフィールやサイト・アプリ内で「話した」ことについて、厳格なチェックが行なわれる。特に、男性側はその女性に対してどれだけ記載されたプロフィールと異なっているか、またインターネット上に掲載された写真とどこがどう違うのかをチェックしなければならず、女性側は男性が二重の意味で出会いの対価を支払うことのできるか、つまり詐欺やだましでないか、本当に対価を支払うだけの経済的・精神的（中には「ヤバイ」男性もいる）に余裕のある男性かどうかを吟味しなければならない。こうして出会った男女は、お互いに出会ったときの表情や服装などの印象、話す内容の正確さと矛盾点、仕草などに注意が向けられる。「対面での会話の持つ特別な効果についてモンテニューが記しているように、「仕草や動きは……言葉を生き生きとさせる。物腰、表情、声、服装、立ち振る舞いによって、ものごとの価値を高めることができる」[Urry 2007=2015 p.348]と記述されているように、その時の印象によって、お互いの関係の価値を上げることもできるし、下げることもできる。

「仕事関係、家庭生活、交友、余暇などのネットワーク形成のために、対面で会うことが非常に重要なのである」[Urry 2007=2015 p.341]。インターネット技術が加速度的に進化・発展していく中で、ますます「出会う」ことや「対面する」ことが重要になってきている。パパ活の顔合わせやお茶は15分から60分程度で、相場的には5千円から1万円程度だが、アーリの言う「集まって会うことが重要である」という時代の要請に応えたものである。であるから、これからの出会い系メディアにおいて、ネットでのファーストコンタクトがますます便利に効率的に、そして快適になる一方で、相手の確認と相手とのさらなる関係の進展のために、顔合わせやお茶はより必然的になっていく。

「独身者は緊密な友人グループを作るようになっており、そのなかで似たようなかたちのケアやサポートが活発になると言うことである」[Urry 2007=2015 p.337]。独身者の場合、この傾向が高まっていく。中高年の男性側にとって、パパ活における行為や関係が、時には性欲解消以外の「癒やし」という名のケアやサポートになること、たとえそれが金銭を前提としたものでも、もはやそれは必然的である。よくよく考えてみれば、カウンセリングや介護サービスは無料ではない。有料で、そしてかなり高額である。性的介護が必須なのは、むしろ当然といえる。し

かも、それが「若い」や「美しい」、「かわいい」、「性的に魅力がある」女性が相手の場合にはその対価がより高額になるのはむしろ当然である。

「特定の社会的ネットワークでは、さまざまな物的目的に照準されていることがよくあり、一時的なたまの出会いをもたらしている。他者との共在が求められるのは…」[Urry 2007=2015 p.344]と記述されているように、「一時的なたまの出会い」こそ、出会い系メディアにおける性的な出会いが現代社会に生きる男女にとって、時には金銭の授受を介しても、性的快楽や癒やし、存在論的安心感を得るためのつかの間の場所と空間となることができる。「このネットワークに関わる人々はそうした物を働かせ続けるためにある特定の場所で出会う」[Urry 2007=2015 p.344]。パパ活の顔合わせの場合、「カフェ」や「飲食店」、「ホテルのロビー」、「駅」などの特定の場所が選択される。出会いの場所は一種の公共空間であり、もし身体の危険などが迫った場合にすぐに逃げ出せるか助けを呼ぶことができるような場所が選択されている。出会い系メディアにおける出会いでは、いきなり相手の自宅やラブホテルの一室で待ち合わせることはない。それができるのは、プロが行う「デリヘル」である。

3-3. 「出会うこと」の重要性と必要性

「本書では、「会うこと／会合／ミーティング」という語を下記の点を指すために用いる。すなわち、「議題」、構造、予定表によって完全に公式化された会合とインフォーマルな会合の両者を指し」、社会学では会うことは「ファン・プレー、ゴフマン、シュワルツマンを除けば」重要視されてこなかった [Urry 2007=2015 p.342]。社会学においては、アーリ以外に幾人かの社会学者によって「会うこと」ことの重要性が指摘されてきた。援助交際やパパ活はインフォーマルな「会合」である。その重要性は上に書いた通りである。パパ活における顔合わせや食事デートの意味はここにあり、主に男性側にとって、女性の属性・特性や言動は決定的な評価の対象となる。お互いが好意的な印象を受け取れば、その関係は次の段階に進むし、そうでなければ関係はそこで終わる。しかし、その目的が男性側は性交や性的行為、女性側はあくまで金銭であるならば、パパ活は性風俗と変わらない。そこで、Pたちや一部のPJたちは、パパ活に別の意味を付与しようとするし、ある意味でそうせざるを得ないのである。

「したがって、共在による出会いは、単に相手に会うという問題ではない。人との結びつきこそが、情動を引き起こすと言えるかもしれない。情動は、相互に関係し合う身体の創発効果であり、とりわけ時空間上の身体の分布を通してもたらされるものである」[Urry 2007=2015 p.349]。男性が援助交際やパパ活という関係において性的快楽の他に得られる「癒やし」や「安らぎ」、相手への「好意」とはこのような情動から引き起こされる。また女性側もこれらを得ることができる。特に女性の場合、社会的に年齢や容姿といった見た目によって選別されてしまうことが多いので、それ以外の理由で、相手から「必要とされる」ことが決定的にその存在論的安心感に影響する。

4. 人間の性欲と社会

4-1. 性欲の社会史

人類史が始まって以来、人類は人間が持っている生物としての性欲、動物としての人間が持つ抑制できない性欲を、社会的にコントロールしようとしてきた。しかし、その試みの多くは失敗

に終わっている。時には、人種の根絶や社会の崩壊をもたらした。2つの事例を見てみよう。

1つ目は中南アメリカ大陸のインディオの歴史と、白人とラテンアメリカの先住民（インディオ）の混血である「メスティーソ」との歴史に見ることができる。メキシコにおいて、過去に「一説には2,500万にいた」インディオは100万人までに減り、メキシコでは「メスティーソを含めた混血の比率はメキシコ人の8割を越える」〔篠原 2022.12.16 p.3〕ようになった。これはスペイン人によって行われた侵略と虐殺、植民地化の結果である。「スペイン人による統治は過酷を極めた。鉱山開発に伴う労役や疫病によって先住民の人口は激減した」。男性だけでなくインディオの女性たちは重労働に従事させられ、スペイン人によってレイプされ、妊娠させられた。こうして生まれたのが、「白人男性と先住民女性の混血、メスティーソ」である。「この複雑な出自がメキシコ人の精神性に深く影響を与えているとパスは言う。メキシコには「チンガール」という独特なスペイン語がある。一義的には「犯す」という意味で、スペイン人の征服者による先住民女性への暴行という歴史が反映された言葉だ。メキシコ社会人類学高等研究所所長の平井伸治によれば、能動的で攻撃的で閉鎖的な男性が、受動的で無防備で開放的な女性を暴行するという二元化されたレトリックで理解される。メキシコ人にとって、人生はチンガールするか、されるかのどちらかである。彼ら／彼女らはスペイン語を話し、アルファベットを使って文字を書く。過去に彼ら／彼女らが持っていた言語や絵文字、その文化は既になく、過去の遺跡の中にその痕跡を見ることができる。

二つ目はオネイダ・コミュニティの事例である。オネイダ・コミュニティはアメリカ社会に1847-1881年の間に実在した社会空間である。「キリスト教による共産主義的ユートピア」の実験場であった。このコミュニティでは、「誰もが誰とでも性交するたてまえ」〔Fisher 1992=1993 p.64〕があり、「特定の個人にたいするロマンティックな愛情は利己的で恥ずべきこととされた」。そして、性交での射精が禁止され、妊娠は忌避された。しかし、「若い男性は年かさの女性とのセックスするようにいわれ、思春期の娘の相手はノイズ（筆者註：コミュニティのリーダー）がすることになっていた。一八七九年、男性たちが反乱を起し、数人の娘を強姦したとノイズを糾弾した。ノイズは逃亡した。数ヶ月のうちにコミュニティは解体した」〔Fisher 1992=1993 p.65〕。結局のところ、特定の男性が若い女性たちを独占することになり、嫉妬や憎悪が生じてコミュニティは崩壊した。年上の女性との性交を命令された若い男性たちは、その恨みによってノイズを糾弾し、身の危険を感じたノイズはコミュニティから逃亡することになった。性の恨みや不満は時には殺人に至るし、社会にとっては目に見えない大きな脅威となる。

これら2つの事例は人類の持つ性欲がいかに制御が難しく、時には破滅的な局面に至るケースがあることを示している。人類史は性欲の歴史であり、社会が性欲をコントロールしようとしてきた歴史でもある。

このような結果がもたらされるのは、そもそも人間の性欲のシステムに問題があるのではないだろうか？離婚原因の一番の理由は「不倫」とされる。愛は三年で終わる。世界62の国、地域、民族グループでの調査では「ピークはだいたい結婚後四年で、そのあとはだんだん離婚数が低下していく」〔Fisher 1992=1993 p.107〕。人類は自己の遺伝子と私有財産の継承のために「結婚」という制度を生み出したが、これは人類の平均寿命が短く社会があまり複雑でないときには機能しただろう。現在では結婚制度のアップデートが必要とされている。情熱的な愛の結果としての

結婚から「恋愛夫婦」が誕生し、ロマンティックな期間が終わると、婚姻内容を「子育て夫婦」や「友達夫婦」、「趣味夫婦」などにアップデートしなければならない。そして、欧米では一般的になった婚前契約によって、離婚のリスクなどに対応している。

また、生殖は偶発的で、優性な形質を確実にその子供に受け継がせることはできない。人類史は英雄と天才の歴史であるが、その英雄と天才の資質や特質をその子供が継承することはまれである。優秀な子孫を残すためには、遺伝子操作されたデザイナーベビーを持つか、人類という種の雄、つまり男性の持つ旺盛な性欲と桁外れの繁殖能力に頼るしかない。ウィキペディアによると、モロッコの皇帝「ムーレイ・イスマーイール・イブン・シャリーフ」はその生涯で1042人（ギネス記録）の子を産んだとされる。しかし、先進諸国に生きる男性にとって、その人物がイーロン・マスクのように一時期日本円で30兆円を超えたような資産を持つ者でも、現実には2桁の子供を持つことも難しい。

4-2. 性欲をコントロールできない社会

人間は社会的動物であるが、同時に文字通り生物学的な動物である。自己の遺伝子（DNA）を後世に残すために、恋愛における高揚感（ハイな状態）、強烈な快楽と、子を育てるための男女の絆と親子の絆を構築した。そして、性交の快楽はテクノロジーが進んだ現代社会においてさえ、人類が経験する快楽の中でも、最も刺激的で魅力的なものである。「進化は、妊娠可能な女性と性交して自分の遺伝子を広める男性には、報酬として快感を与えた。もしそのような快感が伴わなかったら、わざわざ性交しようという男性は、ほとんどいないだろう」[Harari 2011=2018 p.227] と、『サピエンス全史』の著者ユヴァル・ハラリは指摘する。「もしオーガズムが永遠に続くとしたら、幸福に絶頂にある男性たちは、食べ物に対する興味を失くして飢え死にしたり、別の妊娠可能な女性をわざわざ探し求めなくなったりするだろう」と推測する。人間の男性（オス）の不幸はこの快楽が一瞬で消滅することである。

人類という種が一年のうちの1ヶ月か数ヶ月の繁殖期を持ち、短い性交で事を終えるならば、事態はずっとよかった。人類は、特に男性は、この性欲に文字通り生涯にわたって悩まされることになる。「ピーナイル・スパインは類人猿のペニスにある構造で、そのせいで、類人猿はあっという間に射精する。しかし、人間にはそれがないので、性交を楽しむことができる」[Svante 2014=2015 p.302]。もし人類にピーナイル・スパインがあったのなら、現在のような性文化も恋愛文化も存在しなかっただろう。

人間が社会を作った時、人間の持つ性欲は社会がコントロールしなければならなくなった。社会がより広大に、より組織的に、複雑に拡張し続ける段階で、これは解決できない問題として残っている。しかし、いくら技術が加速度的に進歩しようとも、現状を見る限り、この解決には成功していない。今なお、法律と倫理と道徳で押さえ込もうとしている。「売春（買春）は法律によって処罰されます」。「性を金銭によって売買してはいけない」。「売春（買春）は悪いことだ」。しかし、これらの決まり事は現状を見る限りにおいてうまくいってないようだ。性風俗産業や援助交際、パパ活の実態を見ていくと、そのことが理解できる。

5. 今後のパパ活

日本における個人間での売買春は、1980年代以降、「ウリ→エンコー→ワリキリ→パパ活（大人）」と変化してきた。売買春を意味する言葉は、よりキャッチーで短い言葉が選ばれる傾向にある。また、援助交際時に「パパ」という言葉があったように、新しい名称は現代のパパ活やそれに関連するような行為の中で使われる用語にその新しい言葉のヒントがあるかもしれない。パパ活に代わる言葉は、援助交際からパパ活への転換が20年かかり、ローザの言うように「技術的加速、社会変動の加速、そして生活テンポの加速」が進む社会で、パパ活に代わる言葉は今後5年から10年の内に生まれてくるのではないだろうか？「大人」のように性交を意味する言葉ではなく、援助交際やパパ活のように一聞すると、何の行為で具体的に何を意味するのかわからない言葉が選ばれる可能性が高い。「サロン」、「オキニ」、「定期」といった言葉に何が組み合わさることで、新しい名称は現代のパパ活を意味する言葉として、将来において使用されるかもしれない。

援助交際やパパ活のような金銭で割り切った性的な関係は今後ますます必要とされていく。なぜなら、援助交際やパパ活は、結婚という社会制度の中の男女関係における合意ある性交と、性風俗（ソープランドやデリヘル、ピンクサロンなどの金銭によって合意された性的関係を直接的に売買するサービス）の中間に位置し、その液状化の好例であるからである。例えば、「スクープ！大阪在住24歳美人エステティシャンが告白」[FRIDAYデジタル 2023.2.16]という記事では、「24歳美人エステティシャン」と某有名芸能人との「パパ活不倫」が取り上げられていると。この記事に至っては、この記事で取り上げられた性的関係や性的行為が「パパ活」なのか「不倫」なのかよく分からない。この記事で取り上げられた事例は、夫婦関係における愛とそれ以外の愛の形、そして性的関係が現代社会では言わば「ぐちゃぐちゃ」になってその行為の特定すらできないような「液状化」に陥っている好例だと言える。

加えて、一夫一妻制度のような結婚制度が古すぎて現代の夫婦関係に適合せず、現代社会におけるセックスや恋愛の加速度的な変化に対応できないためである。金銭に余裕のある男性側は、1回きりや半年間など、自分の好みに応じて、性的関係を選択できる。特定のカテゴリに属し、若くてセクシーやかわいい、美人、清楚などの属性をもつ女性たちはより多くのチャンスが与えられ、「ファーストレディ」になったトランプ元大統領夫人のように「トロフィーワイフ」にさえなれる可能性がある。現にそうなっている。結婚（公的で正式な性的な関係）－パパ活や援助交際（素人（？）との性的な関係）－性風俗（プロとの性的な関係、金銭によって授受されるサービス）という区分は今後も社会から必要とされ、続いて行けよう。

カナダのメディア学者マクルーハンは、メディアは「メディア（すなわち人間を拡張したもの）」[McLuhan 1964=1987 p.6] や「メディアがわれわれの感覚を拡張したもの」[McLuhan 1964=1987 p.55] で、人間の身体感覚の拡張であると考えた。マクルーハンの考え方に従えば、出会い系メディアは「出会い」そのものを拡張し、新しい形を生み出した。そして、現代社会における性生活のテンポを加速に対応する形で、出会いや性的な関係を拡張し、これらの意味内容を変容させてきたと言えるだろう。

文献

- 藤井良樹, 1994, 『女子高生はなぜ下着を売ったのか?』宝島社.
- Rosa, Hartmut, 2005, “*Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*” Suhrkamp Verlag ; 2022, 出口剛司監訳『加速する社会：近代における時間構造の変容』福村出版.
- Fisher, Helen E, 1992, “*Anatomy of Love: The Natural History of Monogamy, Adultery, and Divorce*”, W W Norton & Co Inc ; 1993, 吉田利子訳『愛はなぜ終わるのか 結婚・不倫・離婚の自然史』草思社.
- 現代ネットワーク研究会編, 1998, 『テレクラな日常』クリエイティブ・ワークス.
- Harari, Yuval Noah, “*SAPIENS: A Brief History of Humankind*”, Vintage ; 2018, 柴田裕之訳『サピエンス全史（下）－文明の構造と人類の幸福』河出書房新社.
- 片山千枝, 2022, 『女子はなぜネットを介して出会うのか: 青年期女子へのインタビュー調査から』青弓社.
- 圓田浩二, 2001, 『誰が誰に何を売るのか? : 援助交際における性・愛・コミュニケーション』関西学院大学出版会.
- 圓田浩二, 2006, 「現代社会における匿名的な親密さ: 出会い系メディアのコミュニケーション」『沖縄大学人文学部紀要』第7号, p.75-85.
- 圓田浩二, 2022, 「「パパ活」の定義論: 「援助交際」と何がどう違うのか?」『沖縄大学経法商学部紀要』第5号, pp.1-18.
- McLuhan Marshall, 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw Hill Book ; 1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論－人間の拡張の諸相』みすず書房.
- 宮台真司, 1996, 「「テレクラ」の民族誌」上野千鶴子編『色と欲』小学館, p.123-166.
- 宮台真司, 2006, 『制服少女たちに選択: After 10 yeras』朝日新聞社 (文庫).
- 荻上チキ, 2011, 『セックスメディア30年史: 欲望の革命児たち』筑摩書房 (新書).
- 荻上チキ, 2012, 『彼女たちの売春 (ワリキリ): 社会からの斥力、出会い系の引力』扶桑社.
- Paabo, Svante, 2014, “*NEANDERTHAL MAN: In search of lost genomes*”, Brockman ; 2015, 野中香方訳『ネアンデルタール人は私たちと交配した』文藝春秋.
- 鈴木大介, 2012, 『援デリの少女たち』宝島社.
- 宝島編集部, 1994, 『誰も語らなかった密やかなテレクラ・ブーム』宝島社.
- Urry, John, 2007, “*Mobilities*”, Polity Press ; 2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ: 移動の社会学』作品社.
- 豊田行二, 1989, 『テレクラ遊び』実業之日本社.
- ヤマダモアイ, 1997, 『オトナの電話ネット攻略読本』ジャパン・ミックス.
- 吉岡哲巨編, 1997, 『オトコとオンナの世紀末 援助交際読本』双葉社
- じゃまール追跡グループ, 1997, 『じゃまール「その後」大追跡!』リクルートフロムエー.

参照URL

アンファー株式会社 2016 「夫婦愛と頭髪に関する調査 2016」

https://www.angfa.jp/_cms/wp-content/uploads/2016/10/7c8779412eb21bf3b142fca142da5398.pdf (2022.12.19参照)

FRIDAYデジタル 2023.2.16 「スクープ! 大阪在住24歳美人エステティシャンが告白 ダウンタウン浜田雅功との「パパ活不倫」」<https://friday.kodansha.co.jp/article/295843> (2023.2.16参照)

「ムーレイ・イスマーイール」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A0%E3%83%BC%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%83%BB%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%A4%E3%83%BC%E3%83%AB> (2022.12.16参照)

中村彩子・木本晴夫 2012 「情報メディア社会における出会いの形態と意識変革」『日本デザイン学会 デザイン学研究 p.1 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/59/0/59_24/_pdf/-char/ja (2022.12.17参照)

篠原匡 他1名 「メキシコ人の心の闇」『売春婦と国境の“渡し屋”』日経ビジネス電子 p.3 <https://business.nikkei.com/atcl/report/16/100500246/100500003/?P=3> (2022.12.16参照)

『ペイターズPJ地雷 掲示板』 <http://www.pjirai.com> (2022.12.16参照)

『SugarDaddy』 (<https://sugardaddy.jp/statistics>) (2022.12.16参照)